たくのほそ道

911.3
オ

おくのほそ道

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人なり舟の上に生涯を浮かべ馬の口とらえて老を迎ふる者は日々旅にして旅を住まとす古人も多く旅に死せるあり予も幾度か風雲の誘ひ止めがたくして

手なへの海辺にさすらへ去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひてやゝ年の暮れぬれば春立てる霞の空に白川の関こえんと心そゞろなる神に物つきて心を狂はせ道祖神のまねきあひて取もの手につかず股引の破れを繕ひ笠の緒付け替へ三里に灸すゆるより松島の月まづ心にかゝりて住る方人に譲るに

芭蕉の庵も住替る代ひなの家

面八句を庵の柱に懸置やよひも末の七日明ぼのゝ空朧々
として月ハ有あけにて光おさまれるものから不二の峰幽か
にみえて上野谷中の花の梢又いつかハと心ぼそしむつ
ましきかぎりハ宵よりつどひて舟に乗て送る千じゆと
云所にて舟をあがれバ前途三千里のおもひ胸にふさがりて幻のち
またに離別の泪をそゝぐ

ゆくはるや鳥啼魚の目ハ泪

これを矢立の初として行道なをすゝまず人々ハ途
中に立ならびて後かげのみゆるまでハと見送なるべし
ことし元禄二とせにや奥羽長途の行脚只かりそめにおもひ
たちて呉天に白髪の恨を重ぬといへども耳にふれていまだ
めに見ぬさかひ若生て帰らバと定めなきたのみの末をかけ

まくとりけ手は草加といふ宿にたどり着にけり痩骨の肩に
かゝれる物先くるしむ只身すがらにと出立侍るを紙子一衣ハ
夜の防ぎゆかた雨具墨筆のたぐひあるハさりがたき餞な
どしたるハさすがに打捨がたくて路次の煩となれるこそわりな
けれ

室の八島に詣す同行曾良が曰此神ハ木の花さくや姫の神
と申て富士一躰也無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に火々
出見のみこと生れ給ひしより室の八島と申又煙を読習し
侍るもこの謂也将このしろといふ魚を禁ず縁記の旨世に伝ふ
事も侍し

卅日日光山の梺に泊るあるじの云けるやう我名を仏五左衛門と
云万正直を旨とする故に人かくハ申侍るまゝ一夜の草の枕

打とけて休給へと云いかなる仏の濁世塵土に示現してかゝる
桑門の乞食順礼ごときの人をたすけ給ふにやとあるじのなす
事に心をとゞめてみるに唯無智無分別にして正直偏固の者
也剛毅木訥の仁に近きたぐひ気禀の清質尤尊ぶ
べし

卯月朔日御山に詣拝す往昔此御山を二荒山と書しを
空海大師開基の時日光と改給ふ千歳未来をさとり
給ふにや今此御光一天にかゞやきて恩沢八荒にあふれ四民
安堵の栖穏なり猶憚多くて筆をさし置ぬ

あらたうと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かゝりて雪いまだ白し

剃捨て黒髪山に衣更　曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり芭蕉の下葉に軒をならべて
予が薪水の労をたすくこのたび松しま象潟の眺共にせん
事を悦び且は羇旅の難をいたはらんと旅立暁髪を剃て
墨染にさまをかえ惣五を改て宗悟とす仍て黒髪
山の句有衣更の二字力ありてきこゆ

二十余丁山を登つて滝有岩洞の頂より飛流して百尺千
岩の碧潭に落たり岩窟に身をひそめ入て滝の裏より見
れはうらみの滝と申伝え侍る也

しばらくは滝にこもるや夏の初

那須の黒ばねと云所に知人あれば是より野越にかゝりて
直道をゆかんとす遥に一村を見かけて行に雨降日
暮るゝ農夫の家に一夜をかりて明れば又野中を行そこに

野飼の馬あり草刈おのこになけきよれハ野夫といへともさ
すかに情しらぬにハ非すいかゝすへきやされとも此野ハ縦
横にわかれてうゐ〳〵しき旅人の道ふみたかえんあやしう侍れ
ハ此馬のとゝまる所にて馬を返し給へとかし侍ぬ
ちひさき者ふたり馬の跡したひてはしるひとりハ小姫にて
名をかさねと云聞なれぬ名のやさしかりけれハ

かさねとは八重撫子の名成へし　曾良

やかて人里に至れハあたひを鞍つほに結付て馬を返しぬ
黒羽の館代浄坊寺何かしの方に音信る思ひかけぬあるし
の悦ひ日夜語つゝけて其弟桃翠なと云か朝夕勤とふらひ
自の家にも伴ひて親属の方にもまねかれ日をふるまゝに
ひとひ郊外に逍遥して犬追物の跡を一見し
那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふそれより八
幡宮に詣与一扇の的を射し時別しては我国氏神正八
まんとちかひしも此神社にて侍と聞ハ感應殊しきりに覚えらる
暮れハ桃翠宅に帰る
修験光明寺と云有そこにまねかれて行者堂を拝す

夏山に足駄を拝む首途哉

当国雲岸寺のおくに仏頂和尚山居の跡有

竪横の五尺にたらぬ草の庵
むすふもくやし雨なかりせは

と松の炭して岩に書付侍りといつそや聞え給ふ其跡
みんと雲岸寺に杖を曳ハ人々すゝんて共にいさなひ
若き人おほく道の程打さはきておほえす彼梺に

高き山ハ松くゆるけしきよし谷道遥にして松杉黒く苔し
たゝりて卯月の天今猶寒し十景尽る所橋を渡て山門に入
さてかの跡ハいづくのほどにやと後の山によぢのぼれば石上の
小庵岩窟に結びかけたり妙禅師の死関法雲法師の石室を
見るがごとし

木啄も庵はやぶらず夏木立

ととりあへぬ一句を柱に残侍し是より殺生石に行く
館代より馬にて送らる此口付のをのこ短冊得させよと乞
やさしき事を望侍るものかなと

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

殺生石ハ温泉の出る山陰にあり石の毒気いまだほろびず蜂
蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほどかさなり死す又清
水ながるゝの柳ハ芦野の里にありて田の畔に残る此所の郡
守戸部某の此柳見せばやなど折々にの給ひ聞え給ふを
いづくのほどにやと思ひしを今日此柳のかげにこそ立
より侍りつれ

田一枚植て立去る柳かな　はせを

心許なき日かず重るまゝに白川の関にかゝりて旅心定りぬ
いかで都へと便求しも断なり中にも此
関ハ三関の一にして風騒の人心をとゞむ秋風を耳に
残し紅葉を俤にして青葉の梢猶あはれなり卯の花の白妙に
茨の花の咲そひて雪にもこゆる心地ぞする古人冠を正し
衣装を改し事など清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ

卯の花をかざしに関の晴着かな　曽良

かくしてこえゆくまゝにあふくま川をわたる ひたりに会
津根たかく右に岩城相馬三春の庄常陸下野の地をさかひて
山つらなる かけ沼といふ所を行に今日は空曇て物影
うつらす すか川の駅に等窮といふものをたつねて四五日とゝめ
らる 先白河の関いかにこえつるやと問 長途のくるしみ身心
つかれ且は風景に魂うはゝれ懐旧に腸を断て
はかはかしう思ひめくらさす

風流のはしめやおくの田植うた

無下にこえんもさすかにと語れは脇第三とつゝけて三巻とな
しぬ 此宿の傍に大きなる栗の木かけをたのみて世をいとふ
僧有 橡ひろふ太山もかくやと閑に覚られて物に書付
侍る其詞

栗といふ文字は西の木と書て西方浄土に便ありと
行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮か宅を出て五里計檜皮の宿を離れてあさか山
有 路より近し 此あたり沼多し かつみ刈比もやゝ近う
なれはいつれの草を花かつみとは云そと人々に尋侍れ
とも更知人なし 沼を尋人にとひかつみかつみと尋
ありきて日は山の端にかゝりぬ 二本松より右にきれて黒
塚の岩屋一見し福島に宿る
あくれはしのふもち摺の石を尋て忍ふのさとに行 遥
山かけの小里に石半土に埋てあり 里のわらへの来りて
教ける 昔は此山の上に侍しを往来の人の麦草をあらして
此石を試侍るを

清水寺を八坂の西にて見つるとき
お茶とうるまやおのうしろの
月の猫のうしろをうつ波の上を富士のつ作茂所
四位八坂の山際一里半ばかりにあり飯塚の里鮫野と
あつねしゆくを九ばかりあり是ゆるまるを波を義し又
樽と大石の話分と人のをしゆるまるを弥寸中と二人の踪ら
かさとはさ古さと一家の石碑を弥寸中と二人の踪ら
しえゆるあり女なれども加ひしき石の寺先
まつるれと彼を弥ぶし男隆波の石碑を書よ
寺に入て茶を乞八坂の義経の古刀弁慶の茂をと
めて什物とす
茂をを力を五月
五月彩のてらく女狩飯塚に泊る温泉ひれ八湯に入て右を
かくて去ゆるおのうしろを茶をひかや
いろの穴うけの箱をををけて上を取り入て露当面
きりうを作る上をもを無ををうをを祈ひられ
物を入て清入をうをんみーを取の穴を湯ひれ八
又旅を如狩をの飯波ゆををしてをうを常形の郎をを
をうをうを市をうをを作る市ひれをつられをとをを戦
旅ををの御狩於為寺の観念を後ををんを石の命し
をを力ををの丸の草一を狩様を物を伊達の大木人を手
狩物白石の蝶をを笠毛の狩を入八茂中形宮方の深川
つをの作ををんを人ををををを入をを狩をを大をを山
陸の里ををみのわ笠毛の中をを狩の社かをを社すき

今にありとをしゆ此比のさみたれに道いとあしく身つかれ
侍れハよそなからなかめやりて過るに蓑輪笠嶋も五月雨の折に
ふれたりと

笠嶋はいつこさ月のぬかり道

岩沼に宿る

武隈の松にこそめ覚る心地はすれ根は土際より二木にわかれて
昔の姿うしなはすとしらる先能因法師思ひ出
往昔むつのかみにて下りし人此木を伐て名取川の橋
杭にせられたる事なとあれはにや松は此たひ跡もなしとハ
詠たり代々あるハ伐或ハ植継なとせしと聞に今将千歳の
かたちとゝのほひてめてたき松のけしきになん侍りし

武隈の松みせ申せ遅桜と挙白と云
ものゝ餞別したりけれハ

桜より松は二木を三月越

名取川を渡て仙台に入あやめふく日也旅宿をもとめて
四五日逗留す爰に画工加右衛門と云ものあり聊心ある者
と聞て知人になる此者年比さたかならぬ名所を考置侍れ
はとて一日案内す宮城野の萩茂りあひて秋のけしき思ひ
やらるゝ玉田横野つゝしか岡ハあせひ咲ころ也日影ももらぬ
松の林に入て爰を木の下と云とそ昔もかく露ふかけれはこそ
みさふらひみかさとはよみたれ薬師堂天神の御社なと拝て
其日はくれぬ猶松嶋塩かまの所々画に書て送る
且紺の染緒つけたる草鞋二足餞すされはこそ風流のしれもの爰に
至りて其実を顕す

あやめ草足に結ん草鞋の緒
かの画図にまかせてたどり行ば、おくの細道の山際に十苻の
菅有。今も年々十苻の菅菰を調て国守に献ずといへり

壺碑　市川村多賀城に有

つぼの石ぶみは高サ六尺余、横三尺ばかりか。苔を穿て文字か
すかなり。四維国界の数里をしるす。此城神亀元年按察使鎮
守府将軍大野朝臣東人之所置也。天平宝字六年参議
東海東山節度使同将軍恵美朝臣朝獦修造也。十
二月一日と有。聖武皇帝の御時に当れり。昔よりよみおける
歌枕おほくかたり伝ふといへども、山崩川流て道あらたまり、
石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代変
じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳
の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、
羈旅の労をわすれて泪も落るばかり也。
それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造て
末松山といふ。松のあひあひ皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる
契の末も、終はかくのごときと、悲しさも増りて、塩がまの
浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、
籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴わかつ声々に、
つなでかなしもとよみけん心もしられて、いとゞ哀なり。
其夜、目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云
ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調
子うち上て、枕ちかうかしましけれど、さすがに辺土の遺
風忘れざるものから、殊勝に覚らる。早朝塩がまの明神に詣

社ハ又再興されて宮柱ふとしく彩椽きらひやかに石の
階九仞に重り朝日あけの玉かきをかゝやかすかゝる道の果
塵土のさかひまて神霊あらたにましますこそ吾国の風
俗なれといと貴けれ神前に古き宝燈ありかねの戸ひらの
面に文治三年和泉三郎寄進とあり五百年来の俤今目の
前にうかひてそゞろに珍しかれハ勇義忠孝の士なり
佳名今に至りてしたはすといふ事なし誠に人よく道を
勤め義を守るへし名もまた是にしたかふと云り日既
午にちかし舟をかりて松嶋に渡る其間二里余雄
嶋の磯につく

抑ことふりにたれと松嶋ハ扶桑第一の好風にして凡
洞庭西湖を恥す東南より海を入て江の中三里浙江の潮
をたゝふ嶋々の数を尽して欹ものハ天を指伏も
のハ波に匍匐ふあるハ二重にかさなり三重に畳みて左に
わかれ右につらなる負るあり抱るあり児孫愛すかことし松
の緑こまやかに枝葉汐風に吹たはめて屈曲おのつからためた
るかことし其気色窅然として美人の顔を粧ふ千早
ふる神のむかし大山すみのなせるわさにや造化の天工
いつれの人か筆をふるひ詞を尽さむ

雄嶋か磯ハ地つゝきて海に出たる嶋也雲居禅師の別室の
跡坐禅石なとあり将松の木陰に世をいとふ人もまれ〳〵
見え侍りて落穂松笠なと打けふりたる草の庵閑に住な
しいかなる人とハしられすなから先なつかしく立寄ほと
に月海にうつりて昼のなかめ又あらたむ江

上手向て宿をもとむれハ窓をひらき二階を作て風雲の
中に旅ねするこそあやしきまで妙なる心地ハせらるれ

松島や　鶴に身をかれほとゝぎす　曽良

予ハ口をとぢて眠らんとしていねられず旧庵をわかるゝ
時素堂松島の詩あり原安適松がうらしまの和歌を贈る
ふくろを解てこよひの友とす且杉風濁子が発句あり
十一日瑞巌寺に詣当寺三十二世の昔真壁の平四郎出家
して入唐帰朝の後開山す其のち雲居禅師の徳化に
依て七堂甍改りて金壁荘厳光をかゞやかし仏
土成就の大伽藍とはなれりける彼見仏聖の寺はいづくにや
としたはる
十二日平和泉と心ざしあねはの松緒だえの橋など聞
伝て人跡まれに雉兎蒭蕘の往かふ道そこともわかずつゐに
路ふみたがへて石の巻といふみなとに出こがね花咲
とよみて奉る金花山海上に見わたし数百の廻
船入江につどひ人家地をあらそひて竈の煙立
つゞけたり思ひかけず斯る所にも来れるかなと宿から
んとすれど更に宿かす人なし漸まどしき小家に一夜をあかし
明れハ又しらぬ道まよひ行袖のわたり尾ぶちの牧まのゝ萱
はらなどよそめにみて遥なる堤を行心細き長
沼にそふて戸伊摩と云所に一宿して平和泉に到る
二十余里ほどゝ覚ゆ
三代の栄耀一睡の中にして大門の跡ハ一里こなたに有秀
衡が跡ハ田野に成て金鶏山のみ形を残す先高館に

のぼれバ北上川南部より流るゝ大河也衣川ハ和泉が城をめぐ
りて高舘の下にて大河に落入康衡等が旧跡ハ衣が関を隔て
南部口をさしかため夷をふせぐとみえたり偖も義臣すぐつ
て此城にこもり功名一時の叢となる国破れて山河あり
城春にして草青みたりと笠打敷て時のうつるまで泪を
落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな　曽良

かねて耳驚したる二堂開帳す経堂ハ三将の像をのこし
光堂ハ三代の棺を納め三尊の仏を安置す七宝散うせて
珠の扉風に破れ金の柱霜雪に朽て既頽廃空虚の叢
と成べきを四面新に囲て甍を覆て風雨を凌

しばらく千歳の記念とはなれり

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遥にみやりて岩手の里に泊る小黒崎みづの小島
を過て鳴子の湯より尿前の関にかゝりて出羽の国に越んと
す此路旅人稀なる所なれば関守にあやしめられて漸
として関をこす大山をのぼつて日既暮ければ封人の家
を見かけて舎を求む三日風雨あれてよしなき山中に逗留す

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云是より出羽の国に大山を隔て道さだかならざれバ
道しるべの人を頼て越べきよしを申さらばと云て人を
頼侍れバ究竟の若者反脇指をよこたへ樫の杖を携て
我々が先に立て行けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

豊前一郡の里やとけ代をよきて見しく新古ふさ
そそ[illegible]ふ[illegible]いくもをきくさまる人[illegible]るけ[illegible]
あさ一里弥[illegible]あさひの[illegible]
[illegible]川へみちはくるかる山形をかをまこてんそわ
ふさ[illegible]ちおそろしき難所はけ板倉山の少をあのれく
家を酒田の海を入方山を後ひ蔵をの中を舟をこてう
[illegible]編つ[illegible]いれ[illegible]
[illegible]の[illegible]仙人堂岩を[illegible]て舟
[illegible]

さらみ[illegible]を集めて[illegible]川
六だい三ヶ羽黒山を[illegible]国司左[illegible]
代金光院開祖を[illegible]南谷の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

八の月山を出る本宿志賀者引き分宮籠り所をとてみ
給かとそこのこそひのれて西方山奥の中に水を出て流て
出るとて八里更に月行道の奥深く入るとはやしられ
息絶ふて入て頂上に登れハ此所月はかり雪を敷
深と枕として明るかるを待のむて西に消れハ向ふ
谷の方にくに銀色小屋とうとは雲の張所雲水を入て
てうに隠居とて剣をうつ孫月山と称をきうて
安とて宮をとるかの就帝に剣を渡をくや千時英那れ
宮をとてうに是を堪能の執法ふぬとしに祈り宮を後
うけてもに伴ふ法と三尺をうの剣の横の法わしまん
ひらうの降後をのこの子切をとをとをまれぬ金槌の
元のうえをうれ突天の横元をうを進をうをし行宮後

西の宮に行をとをとをとをとをとをとを見の地面式
山中の図面行者の法式をとて他をとをとを楽をす仍て
宮をとをとをとをとを
切を頂れ八所宮参の宮を後を三山服礼の為に経冊を
深とをかの三日月は羽黒山
宮の峰いをとをれて月の山
かをとれぬ湯殿をめをす紋うれ
湯殿山 鶴をもをはふをうを 骨良
羽黒をを宮野宮を城六本山代童行をとをものをふはをを
和をををを他法一宮をを大宮を仏を送をぬ川舟を宮を
酒田のみなをを宮を湯殿不和を医師の法を宿をす
湯の宮山や大海をみてみをみ

[illegible]

江山水陸の風光所を尽す事奇観なり海岡の
陵より東北の方山を望む遠く伊豆の海を隔て
里り余所に[illegible]なる富士の山を仰ぎ見る
海の山かくさ国中を英俊と雲と又雨の時
波の時色きまる彩りとりの岩屋を隠を入る雨の時
をとりて多天とくされる[illegible]
奇湾を舟をこの[illegible]舟をとりて三寸出居
の[illegible]舟をはうれいの花の上をくら[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]江上の陵
神功皇宮の[illegible]寺を[illegible]行幸
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

岩上の雎鳩の巣を見る　曾良

波こゆる岩にすむなる雎鳩の巣

酒田の湊より北へ海上三十里あまり行くと象潟の海

象潟や雨に西施がねむの花

文月や六日も過ぬ朝すずし

象潟や波に漕入る浦の秋

象潟の海は、東西へ二里ばかり、南北は一里ばかりにして、海の中に島多し。その島々、海に浮かびて、あるは二つ三つ、あるは五つ七つ、あるは山の形、あるは平らにして、松の緑こまやかに、枝葉海に浮かむ。その色、あるは白砂の波に洗はれて、島の姿、あるは子の産まれ落ちたるに似たり。あるは母が懐に入るごとし。あるは波の上に横たはるごとし。あるは波の中に立ちて、人を招くに似たり。その数、知るべからず。まことに、造化の妙、言はんかたなし。いかなる人か、この所に、筆を残さざらん。

むかし、この所、領主、この島に、長堤を築き、海を二つに分かち、一方を、干潟となし、一方を、入海となす。いにしへ、この堤、ことごとく、波に洗はれ、跡、なかりしとぞ。

干潟は、一面に、蓮を植ゑ、蓮の実、ことしの秋、いまだ、熟せざるに、ことごとく、人、これを、採りて、市に、ひさぐ。

蜑の小舟、こぎつれ、あさりを、求むる、あまの、笛、歌、聞こえ、月、海に入りて、波、たゞよ

一家子世女と和くらう義と　月
曾良とかれハそとゝあ作るくゝ百四十八ゝ徹とうやゝ
ぬ川をゝゝゝて形ゝとゝ海子も堺霞の花浪ハ春ふゝ
ゝも初秋の云とゝ山ゝふものをとゝ人子ゝ多れハゝれうゝ五里
後つゝひゝてむゝゝの山花ゝ入ゝのゝのゝかゝゝうけゝれハ
世ゝの一枚の布のすゝものゝゝゝゝといひれゝゝれゝかゝふゝ入
ゝをのゝゝやゝけ入布ゝゝ後海
卯の月山ゝゝかゝゝ舎ゝゝゝゝ金沢八七月中の五日ゝ
大坂ゝゝかゝふ言人行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ旅宿を作ゝす
一句ゝゝゝゝハけゝゝ名の沢のゝ作ゝゝ世ゝ知人ゝ作
ゝ作ゝ重の名早世ゝゝゝゝ世見追善を催ゝ
ゝ深ゝ動け余作ゝ八ゝゝゝのゝゝ

ゝゝ芭蕉ゝゝふゝゝゝ
秋すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ中金
ゝゝゝゝゝゝゝ義ゝゝ秋ゝ風
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ義　芭
ゝゝ左田の神社ゝ諸寄者ゝ中務のきれゝゝゝ源義ゝ
屬ゝ一対義約ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]